

7 番（小川義昭君）

おはようございます。

議席番号 7 番、白政会、小川義昭でございます。通告に従いまして一般質問を行います。

白山市が誕生して丸 10 年。先月の 2 月 1 日には、鶴来総合文化会館クレインで、市民の皆さんとともに盛大に合併 10 周年をお祝いし、将来に夢と希望を描ける白山市づくりの実現に向け、なお一層の飛躍を誓いました。

山田市長におかれては、市長就任から 3 カ月が過ぎ、これまで 8 回にわたって開催されたまちづくり会議での市民提案をもとに、22 の事業を取り上げて、初めて臨んだ新年度予算編成。市長御自身もその責任の重大さに身の引き締まる思いをなされているとのことでありましたが、常に住民同士の融和や一体感の醸成を念頭に、白山市に住んでよかった、合併してよかったと実感できるふさとづくりを目指して、市民との対話と参加をモットーに、市民本位の市政運営にしっかりとかじ取りされることを御期待申し上げます。

また、昨日、市長からの報告がありました株式会社ジャパンディスプレイのキリンビール北陸工場跡地への進出は、山田市政にとっては、白山市創生に向け意欲的に取り組みをなされようとしている矢先の最高のプレゼントではないでしょうか。白山市民も大いに期待するところであります。

それでは、質問に入ります。

1 番目、千代女朝鮮通信使献上句碑を観光スポットに当ててはという質問でございます。

「春雨や うつくしゅうなる 物ばかり」加賀の千代女の句であります。少しも冷たくない、しとしとと降る雨。一雨ごとに草や木の芽が出始め、遠くの山や平野も緑一色となり、小川の水も豊かに音をたてて、木も石もぬれ、春雨のぬれるもの全てが美しくなっていくますという句です。豊かな自然に恵まれた、美しい白山市の春を象徴するような句であります。

今さら千代女を御紹介するまでもありませんが、御承知のとおり、女流俳人加賀の千代女は、今から 312 年前、1703 年（元禄 16 年）加賀の国松任に表具師福増屋六兵衛の娘として生まれました。

千代女は、松尾芭蕉の直弟子の一人、各務子考の愛弟子として指導を受け、次第に名声を高め、千代女 52 歳のときに剃髪して素園尼を名乗り、60 代のとき「千代尼句集」「俳諧松の声」の 2 冊の句集を出し、全国の俳人に知られるスター的存在になったわけであります。

江戸時代、幕府の将軍の代がわりに朝鮮王国から派遣された祝賀使節のことを朝鮮通信使といいました。過去 12 回、日本を訪れております。その通信使が

1763年（明和元年）2月、徳川10代将軍徳川家治の就任祝いのため日本に訪れた際、将軍家治はその接待役を加賀藩10代藩主の前田重教に命じました。藩主の重教は朝鮮国王への贈り物にいろいろと頭を悩ませた末、女流俳人千代女（当時61歳）に白羽の矢を立てました。全国的にも名が知られている千代女の俳句を朝鮮からの使節に贈って、我が国の俳句文学を紹介しようと考えたのでした。

そして、領国特産の美しい加賀友禅、輪島塗の豪華な蒔絵の箱などとともに、千代女の書軸を献上することを重教は将軍家に申し出、許可されました。

早速、千代女のもとに、掛物6幅と扇子15本に、合わせて21の句を書くようにとの下命がもたらされました。そこで千代女は、これまでに詠んだ1,700にも及ぶ句から、新年1句、春6句、夏4句、秋7句、冬1句の21句を厳選して筆をとり、この大命を果たしました。

日本文学史上、このような形で千代女の俳句が海を越え、我が国の俳諧文学が海外に紹介された例は初めてであります。日朝間の親善大使ともいふべき役割を果たした千代女と、その作品が国際交流上、多大な貢献を果たしたことは疑いのないところであります。

そして、千代女が献上した21の句は、まとめて控え書きにし、箱に入れられて福増屋の家宝として今に伝わっています。

その千代女が朝鮮通信使に献上した21句の控え書きが平成15年8月、松任ふるさと館庭園紫雲園に朝鮮通信使献上句碑として建立されました。

しかし、句碑に書かれてある千代女21句は変体仮名文字で書かれており、よほどの専門家でなければ読み取ることができません。このように歴史的に価値の高い千代女の句碑が今の状態のままでは、人知れずに埋もれてしまいます。

そこで、現代の市民や観光に訪れる観光客の人たちにも読み取ることができるよう、わかりやすく現代平仮名文字に表記すると同時に、21句にそれぞれの解説を記した掲示板を句碑の付近に設置してはいかがでしょうか。

あわせて、俳諧文学として初めて海外を越え、日朝間の親善大使ともいふべき役割を果たした千代女とその句碑を白山市の観光スポットとして、さらに脚光を浴びるような手だてをここに提言いたします。答弁願います。